

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No. 19 2015*

安保とツーリズム  
—韓国 of 軍事文化とダークツーリズム—

佐々木 正 徳・大 宅 美 里

National Security and Tourism  
: Military Culture and Dark Tourism in KOREA

SASAKI, Masanori・OYA, Misato

長崎外大論叢

第19号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2015年12月

# 安保とツーリズム

## － 韓国の軍事文化とダークツーリズム －

佐々木 正 徳・大 宅 美 里

### National Security and Tourism : Military Culture and Dark Tourism in KOREA

SASAKI, Masanori・OYA, Misato

#### Abstract / Short Outline (概要)

This paper describes Dark Tourism in South Korea. Since the Korean War truce of 1953, a military demarcation line (MDL) has been drawn between South Korea and North Korea. In the Demilitarized Zone (DMZ) extending 2km to the north and south of the MDL possession of arms is prohibited, and the entry of civilians severely restricted.

In Korea, many observatories and tourist facilities can be found along the DMZ. They comprise tourist spots for reflecting on national security, and at the same time, provide spaces for making a pilgrimage into dark memory.

Self-naming ourselves as 'Tourist Ethnographers', we went to a number of these tourist spots, for example, observatories, museums, materials centers, tunnels dug by the army of North Korea, abandoned stations, war sites from the Korean War, and so on.

Through these visits, we were able to discover that these tourist spots related to the Korean War comprise boundary spaces, located at the juncture between the ordinary and the extraordinary.

キーワード：徴兵制（義務兵役）、ダークツーリズム、安保観光

#### 1. 悲しみの記憶を巡る旅

##### 1-1. ダークツーリズムへの眼差し

ダークツーリズム (Dark Tourism) とは、「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶をめぐる旅」[井出：2015] のことを指す。もっとも、1990年代にヨーロッパで生まれたこの言葉に、確固とした定義を与えることは時期尚早（あるいは困難）なようである。日本におけるダークツーリズム研究の第一人者である井出明は、いくつかの論考でダークツーリズムについて述べているが、定義については毎回若干の変更がなされている。

例えば、2013年3月に刊行された雑誌『genron etc. #7』から連載がはじまった「ダークツーリズム入門」では「戦争や自然災害の跡を観光資源 (tourism attraction) として捉え、そこを訪問することで悲しみを共有し、死者を悼む営為」であり、修学旅行で広島原爆ドームや沖縄のひめゆりの塔を訪問することは「教育観光」であり「悲しみの共有や悼みを主要な目的としている」とは言いがたい」ために「ダークツーリズムの本義からは若干外れて」と述べている。ダークツーリズムと

は「『どうしてもそこに行かざるをえない』という根源的欲求からなされる観光形態であり、教育はダークツーリズムの核心部分ではない」のである。ただし、直後に「観光」の定義づけが困難であるという事情に基づいて、「災害や戦争をはじめとする悲劇にまつわる場所を訪れ、悲しみを共有し、死を悼む観光形態であるが、その語義の辺縁部分は拡大しつつある」とも述べている<sup>1</sup>。概念の揺れと幅が、ダークツーリズムが生まれたたの研究領域であることを示している。

同年に刊行された「ダークツーリズムから考える」で井出は、「ダークツーリズムとは何かという根源的な問いについては、『戦争や災害の跡などの人類の負の記憶を巡る旅』という考え方で、観光学者の間では、ほぼコンセンサスがとれている」と述べた上で、「ダークツーリズムの概念の辺縁部は拡大しているのかもしれない。しかし、ダークツーリズムという営みは、人類の悲劇の跡を訪れるため、その価値の根幹部分が、“悼み”と“地域の悲しみの承継”にあるという点については確かである。まさにダークツーリズムは“悼む旅”なのである。もちろん学びの要素はあるであろう。しかし、それは悼みに伴う副次的なものであって、ダークツーリズムの核心部分ではない」と述べている<sup>2</sup>。概念の広がり認識しつつも、定義の中心には「悼む」という個人の営みが存在しなければならないことが強調されている。

2014年の「ダークツーリズム」では、ダークツーリズムの「根本的定義では、目的については触れられておらず、単に対象が“戦争などの悲劇の跡”を訪れるとしか述べられていない」ことを考慮したのか、「戦争や災害の跡などの、人類の悲しみの記憶をめぐる旅」と、これまででもっとも簡潔な言い回しで表現されている。ここでは、明確に定義されうるものは訪問する対象（悲劇の跡）だけであり、目的については述べられない。よって、価値についても「教育的価値を重視する論者もいれば、筆者のように死者に対する悼みや地域の悲しみの承継などに価値を見出す者も」おり、それらは「相互に排他的なものではなく、併存しうるもので」あり「多面的な価値を有している」とされる<sup>3</sup>。ここにおいて、学習が主たる理由となる旅も「ダークツーリズム」であることが確認され、しかもそれが、井出がそれまでこだわってきた「悼み」と併存しうるものであるとされた。悼むためには学びは必要不可欠であるし、学ぶことで悲しみや悼みの気持ちが生じることもある。ダークツーリズムにおいては、当初の目的や実際の心の変化はあくまで個人に委ねられる。悲しみの記憶を有する土地を訪問している、ただその事実だけがダークツーリズムの概念を規定しうる。よって、ダークツーリズムをダークツーリズムたらしめる定義は、冒頭で述べたものになるのである<sup>4</sup>。

## 1-2. 地域の特性を発揮したダークツーリズム

現代はさまざまなものが観光資源となる可能性を有している。世界中の多くの地域が観光客を誘致するために「ならでは」の特長を強調した地域づくりをおこなっており、ダークツーリズムの広まりは、その流れに位置づけられる。井出は、欧米のダークツーリズムにナチスに関連する施設が多いことに触れ、そこに「善の連合国対悪のヒトラー」という二元的な対立モデルが存在していることを指摘している [井出 2013d : 146]。井出はその上で、日本的ダークツーリズムの特性を述べる。それは、自然災害の多さと高度経済成長に伴って発生した公害、そして戦争体験の多様性である。「ダークツーリズム研究に関しては、日本は大きなアドバンテージを有している」 [井出 2014 : 217] のである。

ダークツーリズムにおけるアドバンテージは、日本に限ったものではない。隣国である韓国にもそ

それは存在する。植民地期の遺産、軍事独裁政権による民主化運動の弾圧の歴史、朝鮮戦争の戦地がそれである。中でも朝鮮戦争は、国土の多くが戦場となったこと、朝鮮半島・東アジア情勢の現在に少なからぬ影響を与えてきたこと、第二次大戦後の世界秩序の象徴である「国際内戦」であったことなど、特筆すべき点が数多くある。その上、韓国と北朝鮮の関係は現在でも休戦状態、つまり戦時体制が継続している。60年以上も戦時体制が継続している地域は、世界でも稀であろう。また、休戦状態にありながら一方は経済成長を達成し渡航も容易、もう一方は国際社会からの孤立を深めながらも体制が維持されているなど、人類の負の歴史を知るのにこれほど適した地域を他に探すのは容易なことではない。

そして実際に韓国では、北朝鮮との国力の差が明確になり、南北間の宥和ムードも一段落した2000年代以降、分断体制の現実を観光資源として積極的に活用するようになった。休戦協定の調印場所であり、軍事境界線の境目に立つことのできる板門店は、海外からの観光客によく知られた観光地である。他にも、DMZ（非武装地帯）<sup>5</sup>の東端から西端まで、展望台や平和公園、人工洞窟<sup>6</sup>が観光施設として整備されている。また、軍事境界線沿い以外にも、釜山の臨時首都政府跡地<sup>7</sup>や仁川の自由公園<sup>8</sup>など、朝鮮戦争に関連する観光施設は数多く存在する。本稿は、こうした施設がどのような目的をもって運営されているのかを、実際に観光者としての視点でみることによって明らかにしようとするものである。

### 1－3．本論の構成

本稿は、DMZ 周辺に位置する観光施設がどのような目的で運営されているのか、そしてどのような役割を果たしているのかを、実際に現地に観光に行くことによって明らかにしたものである。2 章では朝鮮戦争の史跡を観光することの意味について、先行研究を参考に明らかにし、その後に現地調査の概要について述べる。3 章から 5 章は事例報告である。いずれも DMZ 周辺に存在する観光地であるが、その雰囲気は大きく異なる。最後の 6 章では、DMZ 周辺の観光施設の目的と役割について、異なる施設を貫く要素を抽出する<sup>9</sup>。

## 2．調査の目的と概要

### 2－1．戦跡を観光すること

朝鮮戦争に関する史跡や施設を観光する行為は、韓国では「安保観光」と呼ばれている。安保観光とは、「『安保』と『統一』の側面を併用した政策の代表」であり「国家の安全保障的な側面を、観光を通じて理解させ、精神的な結束を図りつつ、統制下の中での特殊資源の観覧を通じ、観光的な楽しみを与える観光形態」のことである<sup>10</sup>。つまり、国民に安全保障の意識を芽生えさせるためになされる観光のことである。李良姫・福原裕二〔2009〕は、安保観光の分析を行い、太陽政策<sup>11</sup>を嚆矢に開発が進んだ安保観光が、逆に国防の重要性を強調するために国家によって活用されていると論じている。ここでは、太陽政策をすすめる政府、それにより国防の優先順位が低くなることを懸念する軍部、脅威から現実的に解放された結果、統一について様々な方策を考察するようになった国民という、三者関係が描かれる。しかしながら、現地調査の詳細な分析というよりは、時代の変化による韓国社会の変化に力点を置いた記述になっており、実際にダークツーリズムに來ている人々の行動や、観光地が有する意味についてはそれほど詳細に論じられてはいない。つまり、観光者たちが安保観光により

国防の重要性を感じるようになるのか、あるいは統一のためには不必要と考えるようになるのか、明らかではないということである。また、観光者たちが何に価値を見出しているのかについても、必ずしも明らかではない。

轟博志〔2013〕は、韓国のダークツーリズムを「分断と戦争の記憶」「日本統治の痕跡」「現代史の光と影」の三つの潮流にわけ、もっとも新しい流れである「現代史の光と影」に着目し、タルトンネ<sup>12</sup>の観光資源化について述べている。その上で、従来の研究が「観光動機の分析」と「観光開発法案の提案」に偏っていることを指摘する<sup>13</sup>。単なる動機の分析では、ツーリズムが本来的にもつ「心の変化」を描き出すことはできない。ダークツーリズムがある特定の人々の犠牲の上に成り立っている旅である以上、観光者がそこを訪問する動機だけではなく、観光したことがもたらした変化についても明らかにする必要がある。

以上のことから、今回の調査では何より経験を重視することにした。つまり、観光者であるわれわれの「観光動機」と「観光によって得られたこと」に着目するということである。もちろん、物見遊山ではなくフィールドワークであるので、観光中は観光者というよりは観察者としての視点である<sup>14</sup>。そして、李・福原の議論に従って、観光地を整備する側の意図についても考察を怠らないように心がけた。本稿はいわば、「旅する観察者（ツーリストエスノグラファー）<sup>15</sup>」としての研究可能性を模索した記録である。

## 2-2. 調査の概要

2015年3月7日から14日まで、DMZ 近くに存在している観光施設を巡った。訪問した場所は東から順に、高城統一展望台、六・二五戦争体験展示館、DMZ 博物館（以上、江原道高城郡）、第4トンネル、乙支展望台、楊口戦争記念館（以上、江原道楊口郡）、平和のダム、七星展望台（以上、江原道華川郡）、第2トンネル、鉄原平和展望台、月井里駅、労働党舎、勝利展望台（以上、江原道鉄原郡）、鍵展望台、台風展望台（以上、京畿道漣川郡）である。移動はすべて車を使用し、運転は日本語ができる現地の韓国人を1名雇用し、お願いした。ただし、鍵展望台と台風展望台は韓国人の都合がどうしてもつかなかったため、現地在住の日本人にガイド兼運転手をお願いした。

調査方法は、現地に行き、観光することである。展望台やトンネルといった実物と、付設する資料館の見学を通して、それら施設が一般市民に開放されていることの意図を考えた。また、随伴したガイドに事実関係の確認を中心にいくつかの質問をした。また、訪れた土地では犠牲者を悼むことを忘れなかった。

## 3. 事例1：高城地域 ～ 統制区域内、ただし制限のない観光地

### 3-1. 高城統一展望台

高城統一展望台は軍事境界線から約11km離れたところに位置している。北朝鮮を眺めることができる展望台としては最も早い1983年に建てられ、現在は年間150万人を超える人々が訪れている。周辺には海が広がっており、軍部隊（717OP<sup>16</sup>）も近くにある。実際には38度線よりも北に位置しており、朝鮮戦争前は北朝鮮の管轄地であった。ゆえに戦前には金日成、休戦後には李承晩の別荘となった建物が近郊に残されており、展望台とともに観光施設として開放されている。

展望台に行くためには、手前にある統一安全公園で展望台出入申請手続きをしなければならない。



統一安全公園内には「統一展望台出入申請所」があり、そこで代表者と同行者の氏名、年齢、電話番号、出入りする車両のナンバーと車種、韓国人の場合は住民登録番号を所定の用紙に記入し、住民登録証（外国人の場合はパスポート）とともに提出する。住民登録証とパスポートは本人確認が済むと返却される。入場料は大人1名3000ウォン。車で来た場合は、駐車場料金3000ウォンも同時に支払う。窓口で申請確認書のようなものを受け取ると、次に8分程度のスライドを鑑賞する。その後、展望台に向かうのであるが、自家用車の場合はガイドはおらず入構時間の指定もないので申込者各自のペースで向かってよい。申請所にはお土産屋も併設されている。北朝鮮のお酒や韓国の軍人が食べている乾パンなど、北朝鮮と韓国軍に関連するお土産が数多く販売されている。



写真1

統一安全公園と展望台の間には民間人統制線（民統線）があり、そこで検問が行われる。ここで通行許可書の発給を受けることができなければ展望台に行くことはできない。窓口で受け取った書類とパスポートを提出し、結果を待つ。運転手と同乗者のパスポートが確認された後、車の確認がなされる。トランクの中まで確認されてようやく通行許可書の発給を受ける。緊張した雰囲気が漂う場所であった。あらためて展望台へと車を走らせていくと、「地雷注意」と書かれた看板や、上に迷彩柄の巨大なコンクリートの塊を積んだ側壁が目につくようになる（写真1）。側壁は一部を爆破すると上に積まれたコンクリート塊が道路に落下し道路を封鎖することができるようになっている。つまり、北朝鮮が侵攻してきた場合、その進路を塞ぐための仕掛けである。「地雷」という言葉や迷彩柄のコンクリート塊は、否が応でも緊迫感を高めさせる。しかし、統一展望台に着くと広々とした平地の駐車場と、軽食や特産品を売る屋台がわれわれを待ち受けていた。列車を改装したお洒落な食堂もあり、楽しく観光できるように整備されていた。



写真2



写真3

列車食堂の向かいにある白い建物が展望台のようである。車を降り、展望台に向かう。途中、朝鮮戦争で使われた戦車と戦闘機が展示されている。白い建物は2階建てで入口上部に「統一展望台」と書かれている（写真2）。街中ではほとんどみることのなくなった漢字だ。建物に入る前に後ろを振り返ると、山の斜面に「통일（統一）」という文字が浮かび上がっていた（写真3）。ガーデンアートののように、周囲の草木を刈り取り、残った木々によって描かれた文字である。北朝鮮との統一を願っているのだろうか、それとも単に展望台の名前をとっただけなのだろうか。もしかしたら、北からも文字が見えるようになっているのかもしれない。展望台の近くには大きな石碑が建てられており、この地で戦死した多くの兵士の名前が刻まれている。山に浮かぶ「統一」と石碑を見て、あらためてこの地で実際に朝鮮戦争が起きたことを痛感した。石碑の向こう、「統一」の手前には軍部隊の駐屯地が確認できる。石碑、部隊、「統一」、万の言葉を使うよりも、この国の歴史と現状を示す景色である。



写真 4



写真 5

陰鬱な気分になりながら再び前を向き、建物の中に足を踏み入れる。1階を見学してから2階へ進むようになっている。1階には北朝鮮の生活用品やお金、北朝鮮の現状を伝える資料、祖国統一に向けての韓朝の歩みを示したパネルが展示されている。また、北朝鮮の教育制度など北朝鮮の人々の実情が詳しく説明されている。展示を一つ一つ眺めながら2階へと歩を進める。

2階は展望スペースであった。屋内と屋外、両方から北側を眺められるようになっており、晴れた日には北朝鮮に住む人々の生活を見ることができそう。複数設置されている望遠鏡の近くには親切にも展望室から見える北朝鮮の景色を説明するパネル写真が展示されている(写真4)。ここからは朝鮮半島で最も美しいとされている金剛山と、2004年12月に金剛山の陸路観光を実現するために開通された道路である東海線の現在の姿を見ることができる。外に出て自分の目で見てみるときれいに整備された道路が伸びており、金剛山までも見渡すことができた(写真5)。ここには警備のための兵士はおらず、写真撮影禁止との貼り

紙もなかった。写真を撮っている人が多くいた。外にも望遠鏡が設置されており、一角が丸くなっている場所がある。そこは撮影スポットとして看板も立っており、自分たちで写真を撮ることもできるが、カメラマンがきれいに金剛山と一緒に写真を撮ってくれるようになっている。

外国からの訪問者は私たちだけで、残りは韓国人のようだった。家族連れが多く、小さい子供の手を引いて歩く家族もいれば小中学生くらいの子供を連れた家族もいた。明るく楽しげに行き来する家族ばかりで、教育目的というよりは北朝鮮見物に來たという感じがした。また、お年寄りの方々もちらほら目についた。真剣な眼差しで北の方を眺めている姿を見ると「北に離れ離れになった人があるのだろうか」「いまこの風景をどのような思いで眺めているのだろうか」とさまざまな想像が頭の中を駆けていく。石碑、部隊、斜面に浮かぶ「統一」の文字、眼前に広がる北朝鮮の景色、にこやかな家族連れ、北を眺めるお年寄り、そして、この海を越えた国から來たわれわれ。朝鮮半島の「いま」があまりに濃縮されていて、軽く頭痛がした。

統一展望台は生の北朝鮮だけではなく、2008年まで行われていた金剛山陸路観光の実情なども見ることができ、北朝鮮との繋がりを自分の目でしっかり確認することができる場所であった。

### 3-2. 六・二五戦争<sup>17</sup>体験展示館

高城統一展望台の駐車場に併設されている六・二五戦争体験展示館は、統一展望台という場所から平和統一を祈願するという目的のもと開館された<sup>18</sup>。入る前から爆撃のような大きな音が聞こえ、中に入ることが躊躇われた。建物に入るとすぐに朝鮮戦争の写真、戦死した兵士、首を切られた人、子供、捕虜となった人、戦争に参加した他国の軍人などの写真が未修整で壁一面に貼られていた。内部は、東海岸で生じた南北の衝突をまとめた企画展示室、映像体験室、戦争体験室、戦死者遺骨発掘室、

国連軍参戦室などで構成されていた。実際に朝鮮戦争で使われた戦闘靴などの遺品や白骨化した遺体の写真もあり、戦争の悲惨さを感じるに十分な施設であった。また、軍人の生活を紹介する展示コーナーもあり実際に服役している軍人がどのように生活をしているのかを知ることができるようになっていた。出口付近の売店にはミリタリーTシャツや双眼鏡などがあり、また、実際に軍人が着用している下着も売っていた。

### 3-3. DMZ 博物館

統一展望台出入申請所と高城統一展望台の間に DMZ 博物館がある。どうやらこの地域の観光は、統一展望台、六・二五戦争体験展示館、DMZ 博物館がセットとなっているようである。

DMZ 博物館では、休戦協定後の韓国の姿と、休戦協定によって誕生した軍事境界線が持つ歴史的な意味、軍事境界線の誕生によって生じた離散家族の問題、休戦後の軍事衝突、そして、DMZ がはぐくんだ豊かな生態系<sup>19</sup>についての展示物や映像で構成されている。

博物館の入り口には拡声器を積み上げ巨大なスピーカー状態にしているものが置かれていた。これは北朝鮮に宣伝放送をする際に使われる設備を再現したものだそうである<sup>20</sup>。1階は受付で、2階からが展示施設である。2階は主に DMZ の誕生から現在までが展示してあり、朝鮮戦争時にタイムスリップしたかのような感覚に陥ってしまう。DMZ の始まりである朝鮮戦争に触れた展示はわずかで、DMZ の生態系についての展示物が中心であった。

ここで一番印象に残ったのは、DMZ をそのまま再現したような空間である（写真6、7、8）。そこは薄暗く、地面がガラス張りになっており、丸い石の上を歩くと爆発音が辺りに響き渡る。音を聞き、あの丸い石は地雷だと気づく。筆者に地雷を踏んだ経験はもちろんない。だが、アイロニーは十分に伝わる。DMZ は貴重な生態系の宝庫と考えられているが、それをもたらしたのは正確な数が把握できないほどに周辺に埋められた地雷である。兵器によって環境保護がもたらされたという現実を、いったいどのように受け止めればよいのであろうか。



写真6



写真7



写真8

DMZ 博物館では分断の歴史、冷戦の事実と対比させる形で大自然が平和の象徴として描かれている。統一が成し遂げられたとしても、この生態系が開発の名の下に破壊されてしまうわけにはいかない。ある種の決意表明の博物館ともいえるかもしれない。

3階には「平和の木が育つ DMZ」という場所があった（写真9、10、11）。そこでは葉に自分たちの言葉で平和や統一へのメッセージを書き、木に飾ることができる。多くの葉には平和への願いが記されていたが、残念なことに罵詈雑言の類の文字が書かれた葉も飾られていた。日本でも平和を希求する施設における反抗的な行為が問題になることがあるが、韓国でもそれは同様のようである。それは、目的が平和教育であろうと安保観光であろうと変わらないのかもしれない。





写真 9



写真10



写真11

高城統一展望台、六・二五戦争体験展示館、DMZ博物館は韓国と北朝鮮の現在の距離感を知ることができる場所である。三つの施設（と申請所に併設されているお土産店）を通して観光者は北朝鮮と韓国の現在の距離を知ることができる。距離とはもちろん、物理的な距離のこと（だけ）ではない。金剛山観光の現状や土産物屋に並べられる北朝鮮製品の品揃えは、観光者に韓朝の経済的な距離を伝える。また、外国人にとっては、韓国人と北朝鮮との精神的な距離を知ることのできる場でもある。物思いにふける老人と笑顔の親子連れが交錯する展望台は、北への思いが個人レベルでは拡散しつつあることの何よりの証左であるし、分断が豊かな生態系を生み出したことを示すDMZ博物館の存在は、それ自体が朝鮮戦争を悲劇としてのみ語る必要性が失われつつあることを示唆している。

高城に行く前まで、南北は緊張状態にあるため下手に動くとか殺されてしまうのではないかと心配をしていたが、何も心配することはなかった。高城の施設では案内をする軍人やガイドを見かけることはなかった。展望台に行くまでにはいくつもの軍事施設を見たが緊張した雰囲気は感じ取れなかった。列車食堂や戦争体験展示館が有するエンターテインメント性が、観光地に必須のもの<sup>21</sup>と考えるのであれば、検問はむしろ安保観光に必須の要素とみなすことすらできるかもしれない。訪れていた人々がそれぞれのペースで思い思いの場所を回ることができる自由な観光形態、これが最初に訪れた安保観光地で抱いた印象であった。

#### 4. 事例2：鉄原地域 ～ パッケージ化された観光地

江原道にある鉄原はソウルから北北東に約100km離れたところにある。鉄原平野は昔から豊かな穀倉地帯であり、人への食料はもちろん、動物たちにも生命の糧を育んできた。現在も渡り鳥の生息地として知られており、南北を自由に行き来する渡り鳥は統一を希求する人々の憧憬の対象となることもある<sup>22</sup>。

鉄原には朝鮮戦争の激戦地として知られる白馬高地と、1975年に発見された第2トンネルがある。また、最も間近に北朝鮮を観測できる勝利展望台、DMZとその向こうに広がる北朝鮮地域を一望できる鉄原平和展望台がある。軍事区域内にある第2トンネルは鉄原郡と韓国軍が共同で管理運営しているため、指定されたツアーでのみ見学することができる<sup>23</sup>。今回の調査では、第2トンネル—鉄原平和展望台—月井里駅をめぐるツアーと、ツアーの終点にある労働党舎、労働党舎から車で10分ほど行ったところにある白馬高地を巡った。

#### 4-1. 第2トンネル

第2トンネルツアーは1日4回（9：30／10：30／13：00／14：30）実施されている。参加するためには漢灘江（ハントングン）という街にある観光事務所へ行き申請手続きをしなければならない。高城統一展望台の場合と同様に、代表者と同行者の氏名、年齢、電話番号、出入りする車両ナンバー、車種などを記入し、韓国人の場合は住民登録証（外国人の場合はパスポート）を提出する。住民登録証とパスポートは本人確認が済むと返却される。ツアーといえば団体が一つのバスに乗って目的地に向かうものを思い浮かべるかもしれないが、第2トンネルツアーの場合は事前に観光事務所で入場料を支払い、バスには乗らず自分たちの車で移動する<sup>24</sup>。よって、ツアーの参加組が多ければ何台もの車と共に移動することになる。ツアーガイドは、先頭の車<sup>25</sup>に乗り込み目的地に向かう仕組みである。

第2トンネルへの道のりは整備された一本道であり、周囲には畑しかない。観光事務所出発から数分、民統線の検問所に到着する。ここは高城統一展望台とは違い、ガイドが手続きをするためスムーズに通過することができた。検問所から続く長い坂道を走り続けること約10分、目的地である第2トンネルに到着した。



写真12

第2トンネルは北朝鮮軍が軍事侵攻目的で掘っていたものである（写真12）。1975年、警戒勤務中の韓国軍兵士が地下からの爆破音を聞き、数十日間の発掘作業の末に発見された。DMZ 一帯で2番目に発見されたために第2トンネルと呼ばれている。DMZの北限からは3.5kmほど、軍事境界線からは1.1km南まで掘られていた。高さや幅がそれぞれ2メートルのアーチ型のトンネルで、1時間に3万人の兵力と野砲、戦車の移動が可能とされている。発見

後、トンネルの発掘調査をしていた韓国軍の兵士が北朝鮮兵と鉢合わせになり銃撃戦を繰り広げた事件や、北朝鮮軍がブロック壁に仕掛けた地雷と偽装爆発物によって韓国軍兵士が死亡する事故が起きている。トンネルの入口の横には彼らの忠魂碑が建てられている（写真13）。

トンネル内では、落下物から身を守るためヘルメットの着用を義務付けられている。入り口からは階段で地下まで降りて行く。5分ほど階段を下りた後、今度は横に道があ



写真13

らわれる。トンネル内は照明が設置されてはいるものの薄暗く、岩がむき出しのゴツゴツしている細い道を延々と歩き続ける。途中、天井に頭をぶつけながら、落ちてくる雨水を避けながら前へ前へと突き進む。ところどころ、広い空間に出たり、壁に丸い印を見かけたりした。ガイドによると、広い空間は休憩場所であり、丸い印は爆弾が爆発した箇所を示す印だという。15分ほど進んだところで最終地点に到達する。貯水池のようなものと数脚の椅子が設置されていた。終点から数百メートル先が軍事境界線の真下だという説明がされる。しかし、柵によって遮断され、灯りもないためそこまでは見えない。なお、トンネル内は撮影禁止である。

来た道を戻り、外に出ると資料館と売店が併設した場所に案内される。2階には朝鮮戦争時に使われた銃などが展示されていた。何mm銃砲といった武器が展示されていたが、興味がない筆者には何が

すごいのか感じ取ることが難しい。1階へ降りると売店になっており、飲み物、お菓子、軍人用食料などが販売してあった。興味深かったのは米軍の軍事食が売っていたことだ。売店のおばちゃん曰く、売れ線とのことである。

#### 4-2. 鉄原平和展望台

第2トンネルから15分ほど車を走らせると鉄原平和展望台に到着する。展望台までは50人乗りの小規模モノレールに乗って向かう。モノレール乗り場の横にある広い駐車場に車を止め、モノレールに乗り込む。

モノレールからは鉄原の自然とDMZ、そして遠くに微かに北朝鮮を眺めることができる。モノレールを降り、展望台内に入る。第2トンネルと軍の兵舎、検問所を再現した展示物やDMZの写真などが展示されている。ガイドに案内され、建物の2階へ向かうと展望室があった。展望室からは、DMZが大パノラマのように広がっており、手つかずの大自然を自分の目で確認できる。設置してある望遠鏡で大自然を眺めていくと、いつの間にか視線の先が北朝鮮に入っている。南北の近さが実感できる。望遠鏡で丹念に景色を見ていくと、石碑のようなものを発見した。ガイドの口から朝鮮時代に対封国のお城があったと説明されると、鳥肌が立った。自分が見ているものが朝鮮時代の城跡だとわかったからだ。城跡はDMZにあり、なおかつ軍事境界線をまたいでいるため、調査が全く進んでいないそうである。

引き続き望遠鏡を眺めていると、今度は道を発見する。そこには、北朝鮮の軍人と民間人らしき人が歩いていた。見える距離も近くて驚く。人生で初めて北朝鮮の人をみて興奮する一方で、同じ民族が望遠鏡で覗きあっている現実があるのだと考え、悲しくなる自分もいる。

展望室で景色を見た後は1階へと案内される。1階は展示室になっており、朝鮮戦争時にこの一帯で行われた重要な戦闘や、北朝鮮の暮らしについて説明したパネルが展示されていた。タッチパネルを使った展示もあり、韓国と北朝鮮の言葉の違いをクイズ形式で出題していた。例えば、韓国語でトイレは「化粧室(화장실)」と表記されるが、北朝鮮では「衛生室(위생실)」と言われる、といった違いだ。筆者は韓国語を専攻しているため、韓国語を標準として考えてしまう。訛りや方言とは違う言葉の違いがとても新鮮に感じた。

#### 4-3. 月井里駅

月井里駅は京元線の駅の一つで、民間人統制区域内の最も北（つまり、DMZのもっとも近く）にある簡易駅である。現在の駅舎は、朝鮮戦争で廃駅になった場所から移転して1988年に復元されたもので、駅としての機能はない。駅舎の向かいにある車両は朝鮮戦争当時、北朝鮮軍が撤退する際に列車の先頭部を持って行ってしまったために、後部の客車だけが残されたものである(写真14)。また、



写真14



写真15

国連軍の砲撃を受けた人民軍の貨物車も展示されている(写真15)。その近くには「鉄馬は走りたい」と書かれた看板が立てられており、止まった列車とともに、韓国の分断の歴史を象徴



的に表現している（写真16）。

駅の横は軍部隊である。私たちが行ったときは夕方だったためか、若い兵士たちがジョギングを行っていた。観光地の真横に軍部隊があることに驚かされながら、朝鮮戦争での熾烈な戦いが行われたという現実を目の当たりにした。

ここまでが一つのツアーとなっており、ガイドに連れられて帰路につく。来た道とは違う検問所から外に出る。ここでの手続きもガイドが全てしてくれた。検問所を出るとガイドが下車してツアーが終了となる。降り際に目の前の建物が労働党舎の跡だと教えてくれた。



写真16

#### 4-4. 労働党舎



写真17

労働党舎は1946年に朝鮮労働党が住民を強制労働させて建てさせた3階建ての建物である。鉄原郡一帯は北緯38度線の北側に位置していたため、もともとは北朝鮮の労働党舎として利用されていた建物である。また、北朝鮮が共産主義思想を鉄原住民に植え付けようと拷問して脅した場所だとも言われている。朝鮮戦争時に大きな被害を受け、焼け焦げた跡や銃弾の跡、戦車によって壊された壁などが、戦争の激しさを想起させる（写真17）。2001年2月に近代文化遺産に登録され、当時の状況を伝える史跡として保存されている。労働党舎の周辺は他に目立つものは何もなく、遠くに続く広く長い道と田畑しかない。

建物の中まで入ることは禁止されているため、労働党舎の周りをゆっくり歩いてみた。出入り口だった場所をよく見てみると、入ってすぐ目の前に階段があり、左右どちらからでも登れる作りだった。少しずつ歩を進める。むき出しのレンガや、トイレと推測できる場所などが確認できる。内壁一面には銃弾の跡が数え切れないほど残っている。この痛々しい建物と当時の状況を思い浮かべると、鉄原地域とここに暮らす人々が激動の時代を生き抜いて来たことが想像される。

#### 4-5. 白馬高地戦跡地

白馬高地は、朝鮮戦争の戦地の中で最も混乱した激戦地であった。1952年10月6日の中国軍の大攻勢を皮切りに10日間続いた白馬高地戦闘では、領土が24回も変わり、30万発もの爆弾が炸裂したとされている。韓国軍9師団と中国共産党軍38軍の主力部隊による戦闘は、韓国軍約3千人、中国共産党軍約1万4千人の犠牲者を出した。韓国軍9師団は白馬高地の大勝利をきっかけに白馬師団と命名された。白馬高地という名前は、戦争により数多くの砲撃を受けた山が原型を無くし、残った地形が、白馬が横たわっているように見えたことに由来する。この話しは当地の戦争の激しさを語るエピソードとして、現在に至るまで語り継がれている。

駐車場で車から降り、白い木に囲まれた緩やかな坂道を登ると、白馬高地慰霊碑を見つける。戦闘で犠牲となった韓国軍兵士と中国共産党軍兵士たちの御霊を鎮魂する場所のようだ。花が添えられ、線香をあげられるようになっている。その先には小さな展示施設がある。訪問時には閉まっていた中



には入れなかったが、外から中を覗くと多くの写真が飾られていた。この地で起こった出来事などが展示されているようだった。展示室を通り過ぎると高くそびえ立つ記念碑が見える。ここが凄絶な激戦地であったことを記憶するための碑のようだ。記念碑を通り過ぎると視界が開け、展望台にたどり着く。ここからは周囲の大自然と DMZ、白馬高地を眺めることができる。また、山の上に建てられた韓国軍の軍事施設も裸眼で確認できる。現在、この一帯は過去に熾烈な戦いがあったとは考えられないほどの大自然に囲まれている。慰霊碑と記念碑が戦争の記憶を受け継ぐ役割を、自然の中に現れる軍施設が戦争の現実を伝える役割を担っているのかもしれない、ふとそう思った。

第2トンネル、鉄原平和展望台、月井里駅は一つにパッケージ化された観光地である。労働党舎もツアー解散地から徒歩圏内にあるため、ツアー参加者のほとんどは見学をしていくと考えられる。また、通常は自家用車で参加することになるため、さほど遠くない上に知名度が高い白馬高地戦跡地にも、少なからぬ人々が訪問するであろう<sup>26</sup>。ガイドの説明によると、第2トンネル—鉄原平和展望台—月井里駅のツアーには年間2000万人もの人が訪れているそうだ。ほとんどは小学生で安保教育の一環でくるとのこと。所属のガイドが随行する観光形態のため、参加者は現場を見ながら多かれ少なかれ学習することになる。当然、疑問に思ったことがあればその場で質問することが可能である。現地まで行く手間はあるものの、外国人にとっても周到的な事前学習が必要な場所ではない<sup>27</sup>。また、先述したようにツアー終了後には労働党舎にふらっと立ち寄ることもでき、また、少し時間があれば白馬高地を観光することもできる。すべてをゆっくり訪問しても半日程度の行程であり、観光地としてのまとまりがよいと感じた<sup>28</sup>。

### 5. 事例3：漣川地域 ～ ダークツーリズムの意味を熟考させる観光地

江原道を抜けだし、京畿道北東部に位置している漣川郡へと向かう。漣川郡は、東は富川市、西は長檀郡、南は揚州市、東豆川市、坡州市、北は江原道の鉄原郡に面しており、軍事境界線と32kmにわたり接している京畿道最北端の地域である。また、軍事境界線に最も近い韓国軍の展望台（台風展望台）がある。郡全体面積の30%が民間人統制地域であるため、軍の統制により地域住民の生活に支障があることも少なくない。

例えば、今年（2015年）の8月上旬に起きた出来事は、漣川郡と北朝鮮の近さを如実に示すものであった。きっかけは、北朝鮮がDMZに埋めたとされる地雷の爆発で韓国軍の兵士2名が重傷を負った事件である。韓国政府は即座に謝罪を要求するが、北朝鮮は事件が韓国によるねつ造であるとし関与すら認めない。そのため、韓国は報復措置として10年以上中止していた北朝鮮を批判する宣伝放送を、巨大拡声器を用いて開始した。それに反発した北朝鮮軍が砲撃した場所が漣川である。砲撃の射程圏内と想定される地域の住民には避難勧告が出され、数日間の避難生活を余儀なくされた<sup>29</sup>。漣川は距離的な近さだけではなく、軍事的にも北と近い地域であることが伺える。

漣川には鍵展望台と台風展望台という2つの展望台がある。両展望台ともに公共交通機関は通っておらず、自家用車による個人訪問が主である。今回の調査では、韓国在住でガイドをしている日本人女性に車での案内とガイドをお願いした。

#### 5-1. 鍵展望台

鍵展望台は北を一望できる地域に安保教育と失郷民<sup>30</sup>の恨<sup>31</sup>を慰めるため1998年4月11日に建立され

た。建設地の管轄が陸軍常勝鍵部隊であるため、鍵展望台と呼ばれている。展望台内部の展示室には北朝鮮の人々の生活用品や軍事装備が展示されており、北朝鮮の生活ぶりを垣間見ることができる。

先述したように、鍵展望台に向かう公共の交通機関は存在しない。また、鉄原のようにツアーも催行されていない。われわれは案内をお願いした女性が運転をする車に乗せてもらい鍵展望台を目指した。これまでと同様、途中で民統線の検問所がある。ここでまず通過動機を口頭で聞かれる。女性が「鍵展望台に向かう」と伝え、通行申請書の記入と身分証明書の提出を求められる。いつものようにパスポートを手渡す。こちらも要領を心得てきてスムーズである。しかし、これまでの見学場所と異なり、パスポートが一時預かりになった。帰路、通行許可書を返却することで返却されるそうである。ともあれ、手続き自体は滞りなく終了し、展望台へと向かう。途中、大きな文字で書かれた看板を発見する。「第5トンネルは5師団が見つけよう！」と書かれている。単なる士気高揚の標語かもしれないが、北への猜疑心のあらわれともとれる。細く険しい坂道を登って行き、展望台に到着する。

展望台の周りには鉄格子が張り巡らされており、軍事境界線に近いことが想像できた。朝早くに展望台を訪れたからか、展望台にはわれわれしかおらず、兵士が展望室内を掃除していた。別の兵士に展望室に行くよう指示され、掃除をしていた兵士が掃除を中断して展望台の設立経緯や展望台から見える景色を細かく説明してくれた。兵士は毎回説明をしているためか、内容だけではなく言い回しまで暗記しているようだった。展望室の外にテラスがあり、そこに望遠鏡が設置されていた。これまで訪問した展望台では500ウォンを投入しなければならない上に数分間しか使用できなかったが、ここは無料かつ時間の制限なく使用できた。DMZの向こう側にレンズを向けると、何度目かの北朝鮮に住む人の姿を確認できた。今回見えた人は、家畜を放牧していた。案内の兵士から、今の時期(3月)は寒いので外に出る人は少なく、暖かくなってくると田畑を耕す人々の姿が多く見られるようになるという説明を受けた。

展望台の下層には、他の展望台と同様に展示施設があった。漣川郡の部隊の説明や離散家族の現状、また、漣川の自然についての展示物を見学し終わると、韓国軍内の生活を再現した部屋を見つける。兵士が生活する寝床が再現されているほか、冬の雪かきに用いる折り畳み式スコップなど、実際に使用されている道具に触れることができ、韓国軍の兵士の生活を想像することができるようになっていた<sup>32</sup>。

## 5-2. 台風展望台

台風展望台は休戦ラインまで800m、北朝鮮の警備施設まで1,600mの距離に位置している、北朝鮮に最も近い展望台として有名である。1968年に北朝鮮側がDMZを南下して鉄柵を設置し、韓国側も1978年に部分的に鉄柵を北部に設置したために現在のようにごく近い距離に両地域が接すること



写真18

なった<sup>33</sup>。視界が良い日には望遠鏡がなくても、畑仕事する北朝鮮住民を見ることができるそうである。

台風展望台まで行く時も検問所を通る。もはやこの段階で、筆者たちの中で緊張感が高まることはない<sup>34</sup>。鍵展望台同様に通行申請書に記入をし、身分証明書とともに提出する。身分証明書は一時預かりとなり、通行許可書を渡される。イベントに参加するときのネームプレー

トのようである（写真18）。

検問所を過ぎてからの道のりは遠く、砂利道を約20分走るとようやく台風展望台が見えてくる。駐車場へ着き、展望台に行こうと意気込んだ目の前に、今度は超急勾配の坂が立ち塞がる。坂道を登り切るとようやく台風展望台に到着する。まず目に入り込んでくるのは、たくさんモニュメントである。石で作った戦車、朝鮮戦争で奮戦した兵士の像、失郷民の望郷碑が建てられている。他に、韓国軍が北を監視するために使われる小屋まで展示されていた。

この展望台でも私たち以外に観光に来ている者はいなかった。展望室では、鍵展望台と同様、若い兵士の説明を受ける。われわれが外国人だと伝えていたので、ゆっくりと丁寧に説明をしてくれた。貸し切り状態だったためか、一通り説明を終えた後も、展望室から見える景色について詳しく説明をしてくれた。白馬高地、朝鮮戦争の戦禍によって小さくなってしまった湖を、裸眼で確認することができた。ここの望遠鏡も無料で使用することができ、北朝鮮側が設置した DMZ の鉄柵も確認できた。兵士からここの展望室のガラスは防弾性なので銃弾を回避できるから安心して下さいというようなことを言われた。そのときには特に何も感じなかったが、展望台から出るとき、入り口に北朝鮮から台風展望台に撃たれた弾が展示されているのに気付く、悪寒がした。一歩外に出ると常に警戒を怠ってはいけない厳しい場所、一方で優しく気さくな兵士、分断の縮図のような展望台であった。

漣川郡にある2つの展望台に共通していることは、見学はできるものの、高城地域や鉄原地域のようには観光者の訪問にカスタマイズされていないということである<sup>35</sup>。両施設にはお土産屋はもちろん、売店すら存在しない。大きさも高城統一展望台や鉄原平和展望台に比べれば圧倒的に小さい。さらに、周囲に関連する史跡もなければ、観光地やレジャー施設も存在しない。また、両展望台とも入場料が無料である。ゆえに、これらを訪問する人は、訪問する必然性、つまり何らかの理由や目的を持つ人であることが予想される。かれらは、失郷民かもしれないし、北で離散家族が暮らす人かもしれないし、われわれのように学問的関心を持った人かもしれない。いずれにせよ、両展望台で行なわれる観光を分析することで、物見遊山を排したダークツーリズムの原型に触れることができるのではないだろうか。

### 5-3. まとめ

筆者がこの調査をする前に想像していた安保観光は、兵隊に監視されながらガイドの後ろをついて行き、小学生が受けるような同情を誘う逸話を聞かされる、ひたすら受動的な観光形態であった。また、北朝鮮に近いということから銃で撃たれて死んでしまうのではないかと心配までした。休戦ラインにあるどの安保観光施設も大同小異だと考えていたし、留学中に第3トンネルツアーに参加したことのある自分が行っても得るものは何もないのではないかとさえ考えていた<sup>36</sup>。ところが、実際に現地に出向き、死者を悼むことで、今までとこれからの南北関係を真剣に考えようと思うきっかけとなった。また、調査の準備段階で、われわれ外国人が韓国の安保観光施設を無計画に巡ることは大変困難であることにも気付かされた。そして何より、訪れた観光地、高城郡、鉄原郡、漣川郡の観光形態はまったく違うものであった。こんなにたくさんの展望台があってどうするのだろうと思っていたが、それぞれの展望台にはそれぞれの個性があったのである。

最初に訪れた高城地域の安保観光施設は説明をするガイドもおらず、自分たちのペースで自由に動き回れ、訪れる人も老若男女さまざまであった。観光は展望台だけで完結せず、戦争体験館を併設し、



近隣に DMZ 博物館を開設することで、軍事境界線について総合的に知ることができる。また、客車を利用した食堂や、北朝鮮の物産品を売るお土産店など、学びだけではなく楽しめる要素も含まれている。観光者は自らの興味関心の赴くまま、全ての施設を経験してもよいし、特定の施設だけに立ち寄ってもよい。臨津閣に似た方式の観光地である。

二番目に訪れた鉄原地域はガイドと共に行動する。時間と行程は定まっており、ガイドによって施設の説明がなされる、いわゆるパッケージツアーとなっている。ツアー外にも観光施設があり、一日で多くの安保観光施設を巡ることができる。

最後に訪れた漣川地域はすべて自分たちで行動しなければ訪問が困難な場所であった。北朝鮮に最も近いという観光的優位性を有しているにもかかわらず、外国人だけではなく韓国人にとっても敷居が高い。興味がある人しかいかない秘境のような場所であった。

## 6. 安保観光地 ～日常と非日常を架橋する装置～

旅とは、日常から離れ、非日常を体験する試みである。しかし、その定義に従うのであれば安保観光はそもそもの成立背景からして矛盾を孕んでいる。安保観光で訪れるのは多くが現在進行形の戦争に関連する場所であるし、安保観光の目的が国家の安全保障についての理解を促進し、統一に対する考えを深めることにあるとするなら、その旅は日常との連続性を強固に保持していなければならない。実際に、安保観光地を訪問すれば、分断の歴史と現実について多かれ少なかれ何らかの感慨をもつであろう。

しかしながら、そうした感慨を生じさせる場所（観光地）では、圧倒的に非日常が支配している。例えば、民間人統制線は空間的にはもちろん心情的にも、明らかに非日常空間への出入り口の役割を果たしている。展望台から見える DMZ や北朝鮮の景色はどんなに近くても決して触れることのできない景色であるし、展望台に行くまでの道路脇で見かける「地雷注意」の文字、展望台の周りに置かれている戦車や戦闘機、展望台内に設置されている展示室に飾られている戦争関連物品の多くは、筆者にとっては（幸運なことに今のところは）日常ではない。そしてそれは、大多数の韓国人にとっても同様である。では、日常と連続性をもつ非日常とは果たしてどのような状態であろうか。

ヒントは旅が与えてくれた。気楽に行ける観光地の一つである高城統一展望台の民統線を通過するとき、筆者達の中には確かに強いストレスがかかっていた。しかしながら、およそ観光地とは言いがたい台風展望台を訪れるために民統線を通過する筆者達には、ストレスと呼べるほどの緊張感は存在してはいなかった。非日常体験の連続は新鮮さを失わせる。外国人にとって、それは慣れや退屈をもたらすものでしかない。しかしながら、現地で暮らす人々にとってそれは、非日常の日常への侵入であり、ある種の感性の鈍化をもたらすものである。

DMZ 周辺に位置する安保観光地は、手の届く非日常であるために日常との区分が曖昧になっている。統一が最終目標である安保観光にとっての究極的な非日常は、DMZ と北朝鮮の内部である。それは手が届きそうでいて、決して手が届かない。それゆえ、安保観光地は非日常でありながらも日常の側にいる。いわば、圧倒的な非日常と日常を架橋する装置として存在しているのである。ゆえに、安保観光地は、ダークツーリズムの対象たりえる観光地であると同時に、安保教育の場ともなり得る。今後は今回の調査で訪れることの出来なかった DMZ 周辺の観光地にも訪問し、場が果たしている機能について考察を深めていきたい。



## 注

- 1) 本段落のここまでの引用はすべて〔井出 2013a : 47〕による。
- 2) 〔井出 2013d : 145〕。井出は脚注で、日本にはじめてダークツーリズム概念を紹介したフランク・カロリンがダークツーリズムの重点的価値を学びにおいていたため、日本での研究が「悼み」ではなく「学び」に傾注してきたことを指摘している。
- 3) 引用部は〔井出 2014 : 216, 217〕。
- 4) ただし井出は、人類の負の歴史を繰り返さないために、記憶の承継や教訓の蓄積という役割を担うことがダークツーリズムを発展させる意義であることを繰り返し述べている。確かにただのレジャー目的であるなら、戦争跡地や被災地をできるだけ原型を留めた状態で保存する価値も必然性もないであろう。そこでの経験にマイナスの記憶を持つ他者が1人でも存在する限り、遺構を保存し観光地にするという行為には、かれらの傷を引き受けてもおそこに存在しなくてはならない必然性や意義を有していなくてはならない。ゆえに、ダークツーリズムとはかつてないほど「他者からの眼差し」に敏感なツーリズムと言えるかも知れない。
- 5) Demilitarized Zone の略称。軍事境界線から南北に2 km以内の区域のことを指し、南北両軍ともに武器をもって侵入することが禁止されている。長年にわたって人の出入りが制限されていたため、現在は動植物の宝庫となっており、近年は観光資源、研究資源として注目を集めている。
- 6) 北朝鮮軍が韓国に侵入するために北から南へ向かって掘ったトンネルのこと。2015年10月現在で4カ所発見されており、うち3カ所が見学可能である。
- 7) 朝鮮戦争の一時期、臨時で政府機能を担っていた建物。
- 8) アメリカ太平洋陸軍最高司令官であり、朝鮮戦争勃発後は朝鮮派遣国連軍最高司令官となった、ダグラス・マッカーサー元帥による仁川上陸作戦を記念して建設された公園。
- 9) 本稿は佐々木正徳（長崎外国語大学専任教員）と大宅美里（長崎外国語大学学部生）との共著である。1章と2章の1節、6章を佐々木が、2章の2節と3章、4章、5章は大宅が執筆した。全体の構成や文体の統一、文言の訂正などは佐々木が行ったが、学部生の瑞々しい感性が損なわれないように配慮をしたつもりである。
- 10) 〔李・福原 2009 : 117, 118頁〕。ただし、後半の引用は、孫大鉉・崔錦珍「韓国における DMZ 観光のイメージ調査」『観光研究』（2003年）の15頁から李・福原が引用している部分である。
- 11) 金大中大統領（1998～2003在職）の頃に提唱された対北朝鮮有和政策。軍事的緊張を煽るのではなく、相手を包容することで、南北間の緊張関係の改善を試みた。次の盧武鉉大統領（2003～2008在職）も対北朝鮮外交の基本政策として採用した。
- 12) タルトンネのタルは月、トンネは通りや街を意味する。経済成長にともなう都市化の進展により形成された貧民街の呼称である。
- 13) ただし、轟の論点はむしろ、韓国のダークツーリズム研究が「分断と戦争の記憶」と「日本統治の痕跡」に偏っているというもう一つの偏りにある。
- 14) 観光者と観察者との差異、旅日記とフィールドノーツの差異については常に意識しながら調査を行なった。調査法の詳細については稿をあらためて論ずることとした。
- 15) 筆者による造語であるが、もしかしたら類語が既に存在するかもしれない。
- 16) 717は部隊の番号であり、OP は Observation Post、つまり軍事観測所を意味する。よって、717OP とは「第717部隊が管轄する軍事観測所」という意味である。
- 17) 朝鮮戦争は韓国で「韓国戦争」または1950年6月25日に勃発したので「六・二五戦争」と呼ばれている。
- 18) 江原道高城郡の web サイト（韓国語）を参考に記述した（[www.goseong.org/site/tour/page/02/sub\\_02\\_06\\_01.jsp?mode=readForm&articleSeq=300555](http://www.goseong.org/site/tour/page/02/sub_02_06_01.jsp?mode=readForm&articleSeq=300555)）。確認日は2015年11月5日。しかしながら、分断を決定づけた戦争の「体験」が、平和統一の祈願に繋がるという発想に馴染めないのは筆者たちだけではあるまい。
- 19) 軍事境界線が設定されてから60年余りの間、人の手に触れることがなく、また人間の立ち入りがなかったためありのままの自然が保たれている。
- 20) 実際に2015年8月に11年ぶりに宣伝放送が再開され、韓朝高官級マラソン会談へとつながっていったのは周知の通りである。
- 21) ダークツーリズムの現場に存在するエンターテインメント性については、〔古市 2013〕や〔井出 2013a〕を参照。
- 22) 韓国観光公社の web サイト（[japanese.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE\\_JA\\_7\\_3\\_24.jsp](http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_3_24.jsp)）を参考に記述した。2015年11月5日確認。
- 23) 料金は大人2000ウォン、学生1500ウォン、子ども1000ウォン。当日、訪問前に漢灘江観光事業所で申請後に入場可能。外国人はパスポート必須。料金には第2トンネル、鉄原平和展望台、月井里駅の見学料金も含まれている。
- 24) もちろん、自家用車がない人向けに大型バスで催行されるツアーもあるが、それは旅行会社経由で申し込むソウル発着のものが多く、観光当日に漢灘江の事務所へ申し込む場合には自家用車が必要である。
- 25) 運転手は当然、ツアーを申し込んだ客である。
- 26) 現に筆者たちがそうであった。白馬高地戦跡地は当初の行程には含んでおらず、労働党舎を見学した後、せっかくの機会だからと立ち寄ることにした。
- 27) 小学生の学習施設として活用されているのは、そうした敷居の低さにも理由があるのかも知れない。
- 28) ソウルに近いために比較的外国人の見学者も多い第3トンネルツアーの見学は、多くの兵士の監視下で行なわれる。一方、第2トンネルツアーはガイドと共に行動しなくてはいけないものの、目に見える兵士の監視があるわけではなく、ガイドも市民（地方公務員）である。よって、紛争地の見学につきものである緊張感はいささか感じずに観光を終えることができる。こうした施設ごとの運営の違いも、安保観光を分析する有用な視点となりそうである。

- 29) その後、8月22日から25日にかけて高官級会談が行なわれたのは記憶に新しいところである。
- 30) 北朝鮮に故郷があり、戦争で故郷に帰れなくなった人々のこと。
- 31) 「はん」と読む。日本では漢字の持つイメージから恨みや妬み、単純な憎悪の感情のように説明されることがあるようだが、どちらかというところサンチマンに近い。つまり、外に発露される感情ではなく内に秘め積み重ねられる感情のことである。ゆえに、「恨」は「晴らす」ものではなく「解く」ものである。
- 32) ここには過去に実際に使っていた備品もそのまま展示されており、大変興味深い場所であった。また、これまでの観光と異なり急かされることもなかったので、ゆっくりと見学し、望外に長居してしまった。同行していただいた方にとっては意外だったようで、「ここ（兵営再現展示室）でこんなに盛り上がった人たちははじめて」という言葉をいただいた。
- 33) 3章でも触れたように、本来は軍事境界線から南北2kmがDMZでなければならない。
- 34) もちろん緊張感がゼロという意味ではない。慣れというもののすごさと怖さを感じ取っていただければ幸いである。
- 35) 本稿では扱わないが、臨津閣も観光地化された場所として有名である。臨津閣にはソウル発着の観光列車が運行している。
- 36) しかし、行くのをやめようとは露ほども思わなかった。不思議である。

### 【参考文献】

- 井出明 2013a「ダークツーリズム入門 #1 ダークツーリズムとは何か」『genron etc.』#7 (2013年3月号)、ゲンロン、46-53頁。
- 2013b「ダークツーリズム入門 #2 バンダアチェ」『genron etc.』#8 (2013年5月号)、ゲンロン、62-70頁。
- 2013c「ダークツーリズム入門 #3 ダークツーリズムポイントとしての熊本」『ゲンロン通信』#9+10 (2013年10月号)、ゲンロン、66-76頁。
- 2013d「ダークツーリズムから考える」東浩紀編『福島第一原発観光地計画』(思想地図βvol. 4-2)、ゲンロン、144-157頁。
- 2014「ダークツーリズム」大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編『観光学ガイドブック 新しい地歴領野への旅立ち』ナカニシヤ出版、216-219頁。
- 2015「ダークツーリズムとは何か？」『ダークツーリズム・ジャパン』vol. 1、ミリオン出版、2-9頁。
- 李良姫・福原裕二 2009「韓国における民族分断と観光」『北東アジア研究』第17号、117-134頁。
- 大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編 2014『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』ナカニシヤ出版。
- 小田亮 2009「ツーリストとアーティスト」日本文化人類学会編『文化人類学事典』334-335頁。
- 金恵玉 2009「韓国における平和教育の現状と課題」『立命館産業社会論集』第44巻第4号、67-89頁。
- シャープレイ, リチャード 2015「その場所は記憶や思い出を旅人とつなぐ。」『ダークツーリズム・ジャパン』vol. 1、ミリオン出版、10・11頁。
- スレイマン, ラマダニ 2015「旅は未来への適応力を拡大させる。」『ダークツーリズム・ジャパン』vol. 1、ミリオン出版、68・69頁。
- 高岡文章 2014「真正性」大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』ナカニシヤ出版、108-113頁。
- 轟博志 2013「韓国におけるタルトンネの価値転換と観光資源化 —ダークツーリズム『第三の波』—」『立命館大学人文科学研究所紀要』NO. 102、3-35頁。
- 春木育美 2000「軍隊と韓国男性—兵役が韓国男性に与える影響—」『同志社社会研究』No. 4、53-65頁。

- 2011「韓国の徴兵制と軍事文化の中の男性と女性」『韓国朝鮮の文化と社会』第10号、風響社、95-110頁。
- 古市憲寿 2013『誰も戦争を教えてくれなかった』講談社。
- 2015『誰も戦争を教えられない』講談社+  $\alpha$  文庫。
- 2015「東浩紀×井出明ダークツーリズム対談」『ダークツーリズム・ジャパン』vol. 1、ミロン出版、44-49頁。
- 홍두승 2013「남자는 군대에 다녀와야 사람이 되나」김문조 외 공저 『한국인은 누구인가』 21세기북스, p.320-329.